



日本語を学ぶ中国人学生の苦悩



コラムニスト・アジアンウォッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

北京のある大学で先日、日本語を学ぶ学生たちを前に話をする機会に恵まれた。話の内容は「文章を書くヒント」であったが、日ごろから文章下手を悩んでいる筆者が紹介できることは限られており、恥じ入るばかりであつた。何とか1時間話して質疑応答に入つたが、そこから1時間、中国人学生から日本語での質問攻撃にあつた。

「お祭りとお盆にはどのような違いがあるのか」といった日本文化の話や、「日本のドラマ『半沢直樹』をどう思うか。『銀行は人事が全て』というセリフは本当なのか」といったマニアックな質問も出て、実に楽しかった。日本の大学ではとても考えられないほど熱心に質問するし、その内容にもバリエーションがあつて驚いた。

この大学で日本語を教えている友人は、日本の大学の専任講師の口を断わりあえてここで教えている。「決して給料は高くないけれど、本当にやりがいのある職場なんです」と胸を張る。授業が終わっても学生がひつきりなしにやってきて、作文の添削や宿題の相談に来る、日本語のスピーチコンテストがあると聞けば60人の学生が応募して、その一人ずつの発表内容を添削するのに毎晩12時まで残業している、と聞くと正直、昔のテレビドラマの熱血教師を思い出す。先生と学生が一体となつており、実に好ましい風景だつた。

だが、質疑の後半は就活の話題で占められた。「自分が何に向いているか分からぬ」「どんな企業を選べばよいのか」といった質問は日本即戦力を求める日本企業。彼らの思に応えることはできないのだろうか。

セミナーの後も、3人の女子学生が後を追ってきた。「先生、私はどうしてか分からないが、本当に日本が好きなんです」と切実な顔で訴えられ、筆者もどうしてよいか分からなくなつた。そして本音を伝えた。

「あなたは中国人なのだから、まづは中国企業に就職し、中国の企業文化を理解して、営業ノウハウを企業管理能力を身に付けてください。本企業はわれわれに一体何を求めているのか」といった質問には考えさせられるものがあつた。彼らは皆、日本に良い印象を持つており、尖閣諸島問題など物ともせずに日本語を専攻し、日々努力して日本企業を目指している。だが、日本では新卒一括採用を繰り返しながら、海外では即戦力を求める日本企業。彼らの思に応えることはできないのだろうか。

その夜、うち1人の大学院2年生からほぼ完璧な日本語のメールを受け取つた。「まずは国内で自分を成長させる仕事か、営業ノウハウを勉強できる会社に勤めることを考えます。そしていつの日か日本企業で」と力強く書かれていた。

ただ、彼女の優秀な人材が日本企業にやつてくることは恐らくない、と思えてならない。日本企業では文系の修士・博士が尊重されないことを、やがて彼女は知るだろくから。